

# 三作家に就ての感想

南部修太郎

青空文庫



## 一、有島武郎氏

私は有島武郎さんの作品を讀んで、作品のうちに滲んでゐる作者の心の世界といふもの、大ききや、強さといふものを深く感じます。そして、線の非常に太い、高らかなリズムをもつてゐるやうな表現力が鋭く心に迫つて來るやうな氣がします。そして、如何にも作者が熱情的で、直情徑行的な人であるやうな氣持がしますけれども、最う一歩進めて、作品の底を味つてゐると、寧ろ作者の理智といふものがその裡に一層強く働いて居るやうな氣がします。即ち或作品では、例へば、「石にひしがれたる雜草」と云つたやうな作品では、主人公の心持の限界を越えて、作者の理智がお芝居をし過ぎて居る爲めに、その心持がどうしても領けなくなつて來る。で、また作者が愛を熱心に宣傳して居るやうな場合にでも、寧ろその理智を以て故らにそれを力説しようとする爲めに、どうかするとその愛は、作者の心から滲み出たものではなくて、宣傳の爲めに宣傳してゐると云つたやうな感じがする事があります。しかし、又一方から見ると作者の愛が實際にその衷心から滲み出てる例へば「小さき者へ」の中に於ける、

子供に對する主人公の愛といつたやうな場合には、そこに醸されてゐる實感の強さから、可成り感動して作品を讀む事が出來ます。で、一體私は有島氏のその作品並に作者の心の世界に對して共鳴も有ち、その眞摯な作風に對して頭を下げてゐる者ですが、時に人が、有島氏は偽善者ではないか、非常にその創作的態度に於て、進撃的で、意志の強さうなところが有り乍ら、どつか臆病などところがあるではないかといつたやうな言葉を聞かされた事があります。これは無論作者に對する一種の僻見かも知れませんが、事實に於ては、私も氏の作品に強く心を惹かれ乍らも、どこかにまだ心持にびつたり來ない點がないではありません。その隙間は氏が熱情的な理想家のやうに見え乍ら、その底に於ては理智が働き過ぎるといふ結果から、周圍に對してどうしても左顧右眄せずには居られないといふところがあるかも知れません。従つてその思想や人觀の凡てを愛を以て裏づけて行かうとする氏の作家としての今後は、どんな轉換を見せて行くかも知れませんが、その理智の人としての弱點から醸されて來る何物かは、可成り氏の行手にいろ／＼な曲折を出すだらうと思はれます。

## 二、里見弴氏

里見弴さんの作品を讀んで、一番感心するの、その心理解剖の手腕です。批評家がそれを巧すぎると云つた爲めに、氏は巧すぎるといふ事が何故いけないのだと云つたやうな駁論を書いて居られました、確かに巧すぎるといふ事は否定出来ないと思ひます。何故ならば、氏の心理解剖は何處までも心理解剖で、人間の心持を丁度鋭い銀の解剖刀で切開いて行くやうに、緻密に描いて行かれます。そして、讀んでみると、その冴えた力に驚き、亦引摺られても行きませんが、さて頁を伏せて見て、ひよいと今作者に依つて描かれた人物の心理を考へて見ると、人物の心理の線や筋丈は極めて鮮かに、巧みに表現されて居ますが、それを包む肝腎の人間の心持の色合や、味ひが缺けて居ます。必然にどうしてもその心理の動き方が、讀む者の心持にしつくり筋つて來ないといふ氣がします。これを言ひ換へれば、氏の心理描寫は心理解剖であつて、心理描寫ではないのでありますまいか。兎に角今の多數の作家の中で、頭の鋭さといふ點では、恐らく里見弴氏は第一人者といふべきでせう。そして、その文章も如何にもすつきりと垢脱けがして居て、讀んで居ては、實に氣持の好いものですが、特に氏の長所である心理描寫といふ點に就て云へば、そこに最う少し人間的なものが欲し

いと思ひます。言ひ換へれば、氏は餘り巧すぎて、人間の本當の心理の境を越えて飛躍しすぎるのでせう。

### 三、志賀直哉氏

作者の素質の尊さといふものを最もよく感じるのは、志賀直哉氏です。一體私は「留女」以來氏の作品を、今ほどの作家の作品よりも好きなのですが、中でも「夜の光」の中に收められてゐる「正義派」「出來事」「范の犯罪」「清兵衛と瓢箪」特に「和解」には最も感嘆させられました。恐らく洗煉琢磨され、その表現の一家がテエマに對して少しの無駄も、少しの弛みもなく、簡潔緊張を極めてゐる點に於て、志賀氏の作品程なのはありません。この頃の冗漫弛緩の筆を徒らに伸ばしたやうな、所謂勞作を見れば見る程、その一字一句も苟しない氏の創作的態度に頭が下らずには居られません。氏の人生を見る眼は直ちにその底に横はつてゐる眞髓を捉へてしまひます。そして、それを最も充實した意味の短かさを以て表現します。そして茲にこそ氏の作家として天稟の素質の尊さがあるのでせう。恐らくこの點に就ては各人に異論のない事

と思ひます。ところが「和解」<sup>△△</sup>丈<sup>△</sup>けは、氏としては珍らしい程の長<sup>ちやうへん</sup>篇<sup>へん</sup>であり、亦、構<sup>こ</sup>圖<sup>ず</sup>や表<sup>へう</sup>現<sup>げん</sup>の點<sup>てん</sup>に多少の難<sup>なん</sup>がある爲めに、それに就ていろ／＼の議<sup>ぎ</sup>論<sup>ろん</sup>を聞きました。私はよく友人の井<sup>い</sup>汲<sup>く</sup>や小<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>と、それ／＼の作<sup>さく</sup>家<sup>か</sup>に就<sup>きつ</sup>て度<sup>たび</sup>毎<sup>ごと</sup>に議<sup>ぎ</sup>論<sup>ろん</sup>をし合ひますが、三人の意見が、例へば前に舉<sup>あ</sup>げた四つの作では完<sup>くわん</sup>全<sup>ぜん</sup>に一致して居ながら「和解」<sup>△△</sup>に於ては全く違<sup>ちが</sup>つてゐて、今でもまだ議<sup>ぎ</sup>論<sup>ろん</sup>をし合ひます。私が「和解」<sup>△△</sup>を非<sup>ひ</sup>常<sup>じやう</sup>に傑<sup>さく</sup>れた作<sup>さく</sup>品<sup>ひん</sup>だと主張するに反して、井<sup>い</sup>汲<sup>く</sup>や小<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>は「和解」<sup>△△</sup>を餘<sup>あ</sup>り感<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>してゐないので。即ち二人は、この作の表<sup>へう</sup>現<sup>げん</sup>形<sup>けい</sup>式<sup>しき</sup>や構<sup>こう</sup>圖<sup>ず</sup>の不<sup>ふ</sup>統<sup>とう</sup>一<sup>いつ</sup>な事<sup>じ</sup>を舉<sup>あ</sup>げて、作のテエマの效<sup>エフ</sup>果<sup>エクト</sup>が薄<sup>うす</sup>いと云ひ、私は作の構<sup>こう</sup>圖<sup>ず</sup>や形<sup>けい</sup>式<sup>しき</sup>に對する缺<sup>けつ</sup>點<sup>てん</sup>を蔽<sup>おほ</sup>ふ丈<sup>だけ</sup>に、作の内容が深<sup>ふか</sup>い爲<sup>ため</sup>めに、この作の有<sup>も</sup>つ尊<sup>たう</sup>さを主<sup>しゅ</sup>張<sup>ちやう</sup>して止<sup>と</sup>まなかつたのです。こゝらにも各人が作の價<sup>か</sup>値<sup>ち</sup>を批<sup>ひ</sup>判<sup>はん</sup>する心持の相<sup>さう</sup>違<sup>ゐ</sup>があると思<sup>おも</sup>へますが、「和解」<sup>△△</sup>に描<sup>えが</sup>かれてゐる作のテエマ、即ち父と子の痛<sup>いた</sup>ましい心<sup>アインヒウルン</sup>の争<sup>さう</sup>鬪<sup>とう</sup>に對して働<sup>はたら</sup>いてゐる作者の實<sup>じつ</sup>感<sup>かん</sup>、主人公の心の苦<sup>く</sup>悶<sup>もん</sup>に對する作者の感<sup>アインヒウルン</sup>情<sup>アインヒウルン</sup>輸<sup>アインヒウルン</sup>入<sup>グ</sup>の深<sup>ふか</sup>さは、張<sup>ちやう</sup>り切<sup>き</sup>つた弦<sup>げん</sup>のやうに緊<sup>きん</sup>張<sup>ちやう</sup>した表<sup>へう</sup>現<sup>げん</sup>と相<sup>あ</sup>俟<sup>まち</sup>つて、作の缺<sup>けつ</sup>點<sup>てん</sup>を感<sup>かん</sup>じ入<sup>グ</sup>る前に、それに對して感<sup>かん</sup>嘆<sup>たん</sup>してしまひます。その父と子の心と心とが獻<sup>きよ</sup>獻<sup>けん</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に譬<sup>へい</sup>つたり抱<sup>いだ</sup>き合<sup>あ</sup>ふ瞬<sup>しゆん</sup>間<sup>かん</sup>の作<sup>さく</sup>者<sup>しや</sup>の筆<sup>ふで</sup>には、恐<sup>おそ</sup>ろしい程<sup>しん</sup>眞<sup>じん</sup>實<sup>じつ</sup>な愛<sup>あい</sup>の發<sup>はつ</sup>露<sup>ろ</sup>を鋭<sup>す</sup>く描<sup>えが</sup>き出<sup>だ</sup>してゐるではありませんか。かうなつて來ると、一體私は内<sup>ない</sup>容<sup>じやう</sup>の方に心<sup>こころ</sup>を惹<sup>ひ</sup>かれるものですが、

とても形式方面の缺點や非難を顧みる暇はありません。その描かれてゐる事に對して、作の大きな尊さを感じて了ふのです。無論作品といふものに、表現形式の完全といふ事は必要な事ですが、表現の如何を問はず、作者がかういふ意味に眞實を捉へて、それを適確に現はし得てゐるとすれば、そこに最う深い作の意味があるのでありますまいか。私は又氏の「流行感冒と石」といふ作品を讀んで、氏が日常生活の出來事から、如何に深く人生の眞實を捉へ得てゐるかといふ事を、しみ／＼感じずには居られませんでした。



# 青空文庫情報

底本：「文章俱樂部」新潮社

1920（大正9）年3月1日発行

入力：小林 徹

校正：鈴木厚司

2007年11月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 三作家に就ての感想

南部修太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>